



TITLE:

本會觀測部より

AUTHOR(S):

CITATION:

本會觀測部より. 天界 1928, 8(89): 373-375

ISSUE DATE:

1928-07-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161320>

RIGHT:

本 會 觀 測 部 よ り

本會の目的の一つを達成するため1921年末から設けられた「觀測部」は目下下記の6課から成つてゐる。

- (1) 流 星 課……………課長は…小横孝二郎氏(紀州支部幹事)
- (2) 彗 星 課……………同……………山本 一清氏(京都市東一條)
- (3) 變光星課……………同……………中 村 要氏(京都大學天文臺)
- (4) 太 陽 課……………同……………上 島 昇氏(京都大學天文臺)
- (5) 黃道光課……………同……………稻葉 通義氏(京都大學天文臺)
- (6) 豫 報 課……………同……………上 田 穰氏(京都市田中里ノ前町¹³)

觀測部員は、本會會員に限り、申出でたものの希望により上記の何課にでも加入せしめる。人數に制限はない。觀測部費は毎月15錢の割で前納するを要す。此等の部員には機關紙 BULLETIN が無代配布せられるばかりでなく、必要に應じ、手紙やハガキ等で天文學界の急報要報を知らせ、又、あらゆる指導をもする。

今、各課の現況の大略を記すに、流星課は暫く振はなかつたが、今年初から多くの觀測者の参加により頓に活氣を呈してゐる。「天界」や BULLETIN にも近頃報じた通り、今年は1月初のカドラント座流星群、4月末の琴座流星群、6月初のスキエレルプ流星群等の觀測のため特別なプログラムが作られ、我が國最初の流星同時觀測も行はれた。又、小横課長や山本氏の文も度々「天界」誌上に現はれ、部員たちの奮勵を獎めてゐる。いよいよ今年も8月に入り、流星界が多忙の頂上になつた。此の方面には尙ほ多くの新會員が欲しい——いつも書く通り、此の部員には流星觀測用の特製星圖をいくらでも無代で進呈する。其の代り、觀測結果は必ず迅速に報告して貰ひたい。又、本課では新しく改良型の流星用星圖を今製作中である。

彗星課は、實は余り振はない。會員中に彗星觀測上適當な望遠鏡を持つてゐる人も少なくないのであるから、故リード氏の如く盛んに新彗星の發見に努力して貰ひたいのだが、未だ多くの會員には此等の事情が徹底しないらしい、彗星搜索法は「天界」第10號第187頁にも書いてある。新彗星の搜索ばかりでなく、既に位置の知れてゐる彗星の位置や光輝なきの觀測を

やつて貰ひたい希望もある。現に昨年末の大彗星の如きものも突然襲來するところがあるのだから、之れについては「天界」毎號の彗星だよりを良く讀んで貰ひたいこと、BULLETIN の中に出る豫報を好く見て貰ひたい。尙ほ將來此の課の事業を發展させたい。幸か(?)不幸か、今歐米には彗星搜索家が缺けてゐる。リード氏も亡くなり、世界全體として彗星界は淋しい。此の機に乗じて我が國の熱心家が新發見の功名を擧げるには良い時機である。中村要氏は、さきに長野縣の田中氏(?)のために彗星發見用の反射望遠鏡を製作した。

變光星課は今活躍の途中にある。京都大學には渡邊、稻葉、小山、柴田、山本等の諸氏が熱心に研究をやり、中村氏は近頃から非常に優秀な變光星用の星圖の製作に着手した。今後變光星觀測希望者には適當な星圖をいくらでも送ることが出来る。變光星觀測法については「天界」第10號其の他に多くの記事があるし、又、特に注意を要する星や、觀測に便利な星の星圖などは誌上に度々掲載した。中村要氏著「趣味の天體觀測」の中にも詳しい説明が書いてある。望遠鏡を持つ人も、持たない人も大に變光星に努力して貰ひたい。夏は又、新星の多く出る天の河が頭上にある。平常の星座の知識を以つて、新星の發見を目的として活動するのも愉快なこゝである。

太陽課は數年前、一時30人ばかりの人が毎日の黒點觀測をやつたりして非常な盛況であつた。しかし、かねて心配してゐた通り、今は此等の多數の人々が大部分中止して了つて、やはり諏訪の三澤氏だけが著しく目につく。一面に於いて之れは止むを得ないこゝかも知れないが、毎月の BULLETIN を見ても分る通り、三澤氏の觀測ですら曇りのために缺けるこゝがあるのだから、之れを相ひ補ふために、北海道、臺灣、滿洲あたりの熱心家の觀測續行が非常に望ましい。太陽は、何度も報告した通り、今が頂上の活躍ぶりを見せてゐる、來年頃からは幾らか衰へ始める見込みである。太陽紅焰の觀測も、神戸の Schofield 氏が中止したのは残念であるが、京都では、悪天氣に戦ひつつ、中村氏が之れを續行してゐる。長野の田中氏も之れをやりたがつて焦つてゐるが、此の方は未だ着手してゐない。京都大

學では上島氏が毎日美しい太陽の分光寫眞を撮つてゐるし、又、柴田氏が大型の太陽寫眞と黒點寫眞を撮つてゐる。又、山本森川兩氏は黒點週期や活動の研究をやつてゐる。

黃道光は目下大分縣の龜井氏の獨り舞臺であるが、しかし之れには三澤君其の他のやうに、前年からの經驗家も多いのであるから、次ぎの秋の頃からは此の課の活躍が望ましい、此の課のためにも、星圖を進呈する。

豫報課は此の頃最も實(み)のある活動をしてゐる。殊に「天文年鑑」の出版は最も大事業の一つである。BULLETIN の内容中にも此の課の活躍ぶりは伺はれる。「天鑑」の第2號は、山本氏を主任として、目下計算編輯の最中で忙しい。第一卷の成績により、第2卷のためにいろいろの忠言を望む。

尙ほ、最近の學界の趨勢により、我が觀測部には掩蔽課が新設したい希望がある。多分之れは近いうちに實現するこゝと思ふ。

ク ロ ム メ リ ン 氏 より 來 狀

今朝 Crommelin 氏より手紙が到着。誤算に對する詫び狀であるが、之れと共に最新の彗星(1927K)軌道要素を書いてよこした。其れに據るこゝ、

近日點通過(T)	1927年十二月18日18340, U.T.,
近日點引數(ω)	47° 11' 13''/24
昇交點黃經(Ω)	77 13 29.62
軌道面傾斜(i)	85 6 22.01

} (1927.0)

近日點距離〔對數〕($\log q$) 9.2462789

そして流星の輻射點は [E. & A. M. IV, (84), 114.]

赤 經 33°

赤 緯 +39°

と算出してゐる。之れが上記の中村氏の觀測と頗るよく一致してゐるこゝは愉快である。(1928年七月4日。山本)